





令和 4 年 2 月 8 日

工学研究科委員長
掛下 知行 殿

審査委員会報告書

審 査 委 員		
(主査) 教授 三 寺 潤		教授 
教授 西 尾 浩 一		
教授 趙 領 逸		

学位論文提出者氏名

スタッス・ポンパン

学位論文題目

Relations of Techniques and Mental States in Ceramics Making
: Participants' Mood Change Caused by Ceramic Art Workshops

学位申請受理年月日

令和 4 年 1 月 26 日 (水)

1. 学位論文の内容の要旨

別紙論文要旨のとおり

2. 学位論文審査結果の要旨

心的状態の改善に「良い」とされる陶芸は、セラピーや作業療法といった分野のワークショップに取り入れられている。しかし、それらは粘土の造形に限られ、「プロセスや技法」と「効果」の関係はあいまいなまま行われている。また、陶芸家やデザイナーが介在しないことによって、多くの人が楽しみながら心的状態を改善できる「アートアクティビティ」として一般的な展開はなされていない。本研究は、精神状態の改善に効果的な陶芸プログラムを設計するために、陶芸技法と心的状態変化の関係を調査し、陶芸アートワークショップの展開について、分析していることが大きな特徴となっている。

論文は 8 章から構成されており、第 1 章は序論として研究の背景と目的を述べている。第 2 章では、適切な陶芸アートワークショップのデザインを戦略略的に行うことを目的として、筆者が実践したプロジェクトをもとにクラスター分析等を用いて分析し、技法と心的状態の関係を明示した。続いて、第 3 章では、2 章で扱った 6 つの技法、

8つの装飾方法をさらに整理、考察を行っている。第4章では、ワークショップのデザインを行うために、ハンドプレスやスタンピング、スリットレーリングの3種類の造形技法について被験者を用いて造形試験を行った。さらに、これらの有効性と適切な評価方法の検討を行うために、第5章では被験者によるワークショップを行い、定量的および定性的な手法を用いて評価と分析をおこなった。実験的ワークショップでは、「技法の違い」と「心的状態の変化」に有意な差はみられなかったが、造形的特徴によって分類したところ、造形的特徴と心的状態の変化に有意な差を確認することができた。造形的特徴に着目した評価方法に従い、技法の特性に着目し、技法の選別とプロセスを再度検討し、ワークショップのデザインを再度行った。第6章では、福井県済生会病院にてワークショップを実施し、その効果をさらに検証している。分析の結果、ワークショップ前後の参加者の心的改善に有意な差が確認できた。また、得られた成果物の造形的特徴から分類を行ったところ、反復的構造が作成されたグループは、特に＜緊張＞、＜混乱＞に有意な減少がみられ、スタンピングの技法が用いられていることが明らかとなった。さらに、第7章では、そのプロセスを参加型アートに落とし込むために、展示会を継続して実施し、研究における社会的な芸術活動の可能性を提示した。第8章では、本研究の結論を以下のように整理している。陶芸ワークショップにおける「成果物の造形的特徴」に着目し、効果を検証することで、適切な技法選択を行い、より心的状態の改善効果が得られるワークショップデザインが可能であること示した。また、専門的な陶芸技法をワークショップに取り入れることで成果物のクオリティが向上し、作業療法やセラピーとは異なる“心的改善を得ながらお互いの制作物を鑑賞する「新しいアートアクティビティ」としての展開の可能性を明示した。

学術的な意義は下記のとおりである。1) 陶芸ワークショップの効果を定量的に検証した例は少なく、制作物の造形的特徴に着目し、技法の効果検証と制作時の心的変化を捉えたところに、創造行為と感性の関係解明に関する知見を明示できたことは学術的な意義が認められる。さらに、2) 専門的な陶芸技法を活用することで、セラピー的ワークショップでは埋没してしまう参加者の制作物を展示し、参加型アートとして展開してゆくことの可能性を示した。

上記の研究内容を審査委員会で慎重に検討した結果、提出された論文は、学術的にも応用場も重要な多くの新しい知見を含んでおり、博士（工学）の学位に値するものと判断した。

3. 公聴会の日時

令和4年 2月 8日（火）

4. 最終試験結果の要旨

令和4年 2月 8日（火）の公聴会終了後、論文内容およびそれに関連したいくつかの事項について諮問をおこなった結果、的確な回答が得られたので、最終試験を「合格」と判断した。

5. 審査委員会の所見

審査の結果および最終試験結果等を考慮して、申請者は博士（工学）の学位を授与される資格を有するものと認める。